

悲しみをわかちあう

文 中野 東禪

宝暦五年の秋もふかまり、一縷いちろののぞみをかけていた畑の作物や山野の木の実も、すでに絶望になっていた。海岸の村ではそれでも海産物があった。しかし、それとても山間部よりもましというだけで、この飢饉ききんには焼け石に水であった。

みのりのない田畑は、人の気配もとだえ、鳥獣の声さえめずらしくなって、妖気すらただよっていた。

そんな中を、鞭牛さまは歩きつづけた。あちらに人死にがあり、こちらにゆきだおれがある。その人たちを葬り、供養し、餓えた子供をみつけては、一碗の汁をわかちあひはげます。ただそれだけが、鞭牛さまや、善意の人々の精いっぱいなのなぐさめであった。

こうして歩くうちに、善意の人々と鞭牛さまとの間に、いつしか信頼感が育ちはじめていた。豊間根村とよまねの荒川の奥に穴乳観音をひらいたのも、そうしたつながりの中から生まれた祈りの実現であった。

そのころ鞭牛さまは、南川目の岩窟に住むようになっていた。

山田から豊間根を通して閉伊川の腹帯へぬける、南々東から西北へぬける道すじから、すこしはずれたところにある、鉾山のあとがその岩屋であった。

寺を出、隠居屋敷もすてて、岩窟の中にこもらずにいられなかったのは、なぜであろうか。

鞭牛さまには、すでに何人かの有力な人物が壇越だんめつ（信者）になっていた。花輪村の肝煎きわいり（村長）伊藤太郎や、川目の日陰平の大久保という人などがいた。この飢饉のさ中に、こういう人々の援助がなければ食をつなぐことはできないし、また、その援助は鞭牛さまだけをうるおしていたのではなく、餓えた子供たちをもうるおしていたのだった。

日陰平の娘は、しばしば食べ物を運んでくれた。しかし、それとても十分というわけではなかった。鞭牛さま自身、飢饉の中を生きていたのである。

秋くれば木の実かやの実なりけりぶどうひろくちとりくろふべし

と鞭牛さまは詠むのであった。

しかし、その木の実を求め、採集するのも容易ではなかった。がっしりとした体躯に、四十六歳という壮年の重みをもった鞭牛さまであつたが、この岩屋のくらしは、すでに隠居というか遊行上人のようなおもかげを宿していた。それは青年時代に、鉾山運びの牛方をしていたときの風餐露宿（風に吹かれ露にぬれながら野原に起き伏しする）のくらしが性根にしみついていたからこそでき得たものであろうが、鞭牛さまをして、なおじつとしていられない想いにかりたてたのは、この未曾有の天下大飢饉であつた。

山ぶかい橋野村の林宗寺や隠居所へ帰ることは、小さな村に一人前の食い扶持をふやすことになるとなれば、橋野村に帰ることなどできようわけもなかった。

南川目の岩屋は奥行き八間半、入り口は一間半ほどだが、中は瓢箪型になつていて、広いところは三間ちかくあつた。その中に石畳を二重につみあげて風をふせいだ。

いちばん奥の高くなつたところに、弥陀 薬師観音と、三尊の名号を石にきざんで祀り、入り口の広間には右と左に、“南無大悲諸仏神” “南無大悲諸菩薩”の二つを記し、さらに入り口には、“十檀林山”の石をおき、その対には、長沢の南の又の岩の穴 本来空の住みかなりけり”と、うたをきざんだ石を配した。

見よう見まねだが、いつのころおぼえたか、たがねとげんのうで石をきざむよろこびを、鞭牛さまはもっていた。

檀林というのは、修行道場、学問道場という意味である。この洞窟が盛大な仏教道場であるとの宣言である。それは鞭牛さまの心の広さであつた。それに何よりも、晩年になつてからの出家として、自分なりに学問と座禅に対する熱い“おもい”でもあつただろう。

そういえば、この春に寄進された橋野村の隠居所には、“鶏頭山牧庵”の碑をたてていた。鶏頭山というのは、インドのマガダ国のアショーカ王が建てた鶏園寺のことで、学問僧を打ち出したところである。鶏頭山の裏には、“南無一万八千迦羅仏”としるしている。迦羅というのは時のことである。

そして、“南無月光面仏” “南無真口仏” “南無百姓仏”などの碑を隠居所のまわりに建てていた。月光面というの『仏名経』にでてくる寿命一千八百歳の仏である。

そうしてみると、鞭牛さまは人々の長生きをひたすら祈りつづけていたことがわかる。

このように多くの石仏をまつる鞭牛さまの信仰が、のちの道供養碑へとつながつてゆくのであつた。それはまた、鞭牛さまが人々を教化する仕方でもあつた。

南無阿弥陀仏頼む心は珠数の玉引っくりかえせ百万遍も

とうたっている。鞭牛さまは、百万遍念仏をすすめていたのである。鞭牛さまの声は、朗々として聴く人の心身に徹してゆくのであった。

岩屋を根城にして、餓死者供養に歩く鞭牛さまの念仏と和讃の声は、子を失った人や、親を失った子らの心を、いかほどかなぐさめてくれたにちがいない。

(つづく)